



白門板橋

2016. 3. 15 VOL.45

編集
発行

中央大学学会 東京板橋区支部
〒174-0063 東京都板橋区前野町2-16-1-410 TEL03-6753-8771



■「新春の集い」ご挨拶 母校と共に歩んでいこう

支部長 池田巨利

新年、明けましておめでとうございます。

会員の皆様には、お健やかに新しい年をお迎えのこととお喜び申し上げます。皆様には、日頃より支部活動にご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

皆様ご存知のとおり、毎年正月にテレビをにぎわす箱根駅伝で、母校はこのところ不振続きで、昨年の予選会で出場権は得られなかったものの本選では15位で、昨年に続きシード権が取れませんでした。

しかし、良い話題もたくさんあります。昨年の司法試験の合格者は、中央大学法科大学院が170人でトップでしたし、発表された母校の中長期事業計画（2016年からの10年間）では、素晴らしい企画が網羅され、中でも目を引くのは、2022年までに後楽園キャンパスに法学部を移転して法科大学院と一体的に配置するというものです。またスポーツ振興の計画が順調にいけば、箱根駅伝でのシード権を心配することもなくなります。

母校の学会会は巨大な組織です。一方、当支部は小さな地域支部にすぎませんが、小さいながらも出来る限りの行事を開催し、広報活動も行い、支部の結束を固め親睦を深めています。

今年の総会は、役員改選の時期でもあり、新たな体制で出発したいと考えています。今、一番の悩みは、会員数の減少です。会員こそが力のみなものです。会員を増やすのはどうしたらよいでしょうか。

皆様の暖かいご支援無くして、支部の運営は成り立ちません。どうか今後とも、よろしくご指導、ご協力の程、お願い申し上げます。

最後に支部ますますの発展と会員皆様のご健勝を願って、私の新年の挨拶とさせていただきます。

支部のニュース

■新春の集い

恒例の新春の集いは、平成28年1月23日(土)午後6時から、会員40人が参加して、区立文化会館大会議室で開催された。



▲池田支部長の新年の挨拶

司会は大野正浩幹事長が担当、まず初めに全員の記念写真を撮影(表紙に掲載)、続いて池田が新年の挨拶(巻頭言に記載)を述べ、懇親会となった。

関上裕次監事の発声で乾杯、和気あいあいの祝宴となり、初参加の高月利昌氏の紹介や佐藤 義カヲオケ同好会会長の進行による会員の持ち歌の披露などもあって、楽しいひと時を過ごした。

最後に中三川孝幸常任幹事の音頭で校歌・応援歌・惜別の歌を合唱し、須田幸男副支部長の三本締めでお開きとなった。(池田亘利)

■区民まつりで会員募集

恒例となった板橋区民まつり(平成27年10月17日~18日)で、会員募集の一環として板橋白門会の幟を掲げた。



板橋一中の校庭では、区民参加店や各種団体のPR、各県人会による物産や食品販売などで賑わう。メイン道路では、神輿を担いで練り歩き、花笠、よさこい、阿波踊り等が晴れやかに舞い踊り、板橋では一番人手の多い催し物である。

今回も伊藤元太郎会員(昭34卒)の車庫をお借りし、各プロックの方々が交代で受付を担当した。十数名の問い合わせがあり、その中で2名の方が、その場で年会費を納めてくれた。

平成卒の若い会員が2名も増えたことは、喜ばしい限りです。若さと行動力で今後の支部を担って活躍してくれることを願っています。

(編集部◎・新入会員のお名前は5ページに掲載いたしました)

■焼肉と酒で忘年会

平成27年の忘年会は、12月10日(木)大山ハッピーロードにある焼肉店「ふうちゃん家」にて大山・大谷口プロック担当で開かれた。垣内 茂プロック長を先頭に、各世話人が中心となって33名出席で宴会開始。



▲1年の苦勞を忘れて乾杯

板橋区支部も御多分にもれず高齢者が多くなり、焼肉が受け入れられるか心配でしたが、心配は無し、肉のお代わりが出るほど、評判は上々でした。

酒も進む中、準公式野球部・柔道部・空手部等で活躍した強者達、体育会系の近況や報告で盛り上がり、親睦もますます深まった。楽しい宴は短く感じるもの、気が付けば終了の時刻、名残惜しむ中、解散となった。

(大野正浩)

■菅 東一氏、国の叙勲と区の表彰を受章、祝賀会開催

昨年、春の叙勲で「旭日小綬章」、秋には「板橋区政功労者」という国と板橋区からのダブル受章を受けた菅 東一氏を祝う会が、11月24日、池袋のホテルメトロポリタンで開催された。

内田元都議会議員、前田都副知事、下村衆議院議員、坂本区長など、多くの政治家、行政官、後援会の方々が集まり、総勢370人の大盛会となった。当支部からも18人の会員が出席し祝意を表した。



▲都議団より祝福されるご夫妻(右端)

菅氏は、昭和42年法学部を卒業後、法律事務所勤務、平成3年板橋区議初当選、区議会議長を経て、平成19年都議会議員、都議会警察・消防委員会委員長を歴任、長年にわたる政治家としての経歴が高い評価を得た。(伊藤 潤)

母校のニュース

■遠藤利明氏、東京五輪担当 国務大臣留任

昨年10月7日に発足した第3次安倍改造内閣において、遠藤利明氏（昭48年・法卒）が、東京五輪担当国務大臣として留任した。

■平成27年度の司法試験、 中大は合格者数第1位の成績

9月9日、法務省により発表された、平成27年度の法科大学院別合格者数は、

- 第1位 中央 170人
- 第2位 慶応 158人
- 第3位 東京 149人
- 第4位 早稲田 145人
- 第5位 京都 128人

（以下略）

母校は第1位の栄冠に輝いた。中大法料の面目躍如たるものがある。しかし、2011年から、法科大学院に通わずに予備試験を選択して試験を受けることが可能になり、今回、予備試験での合格者は、中大を抜き186人であった。予備試験合格者の増加という事は、今後、議論を呼ぶであろう。

■中大の中長期事業計画

中大は、昨年11月9日に、2016年度を起点とする10年間の中長期計画を発表した。

計画書には、大きなヴィジョンが表示されており、その後、具体的な明示も行い、部外者には分かりづらい点もあるが、おおむね、次のような計画と思われる。

- 一 新学部部の増設

現在の学部は6学部であるが、新たにいくつかの新学部を創設する準備を進めている。

- 二 二大キャンパスの整備

多摩に国際寮を充実し留学生の環境を整備。後楽園には法学部を移し、法科大学院と一体化する。

- 三 グローバル化

すべての科目を英語等で教えるなど、国際化された大学を目指し、世界に中大の存在感を示す。

- 四 スポーツ振興を図る

東京オリンピックや箱根駅伝のスポーツ振興に力を入れ、強化推進室（仮称）を設置する。

以上、母校がホームページで公表した事業計画を、簡単に分かりやすく列記したものである。

もし、誤った箇所があれば、どうかお許しいただきたい。

（編集部）

■ホームカミングデーに参加

母校では、10月25日（日）、創立130周年を祝う第24回ホームカミングデーが開催された。小春日和の当日、私は気が置けない小宮 仁君と池袋で落合い、二人で八王子に向かった。

会場に到着後、メイン会場に支部旗を立てテーブル席を確保、クレストホールに向かった。ステージに全国各地から集まったOB・OGの掲げる支部旗が並び、強く「中央の絆」を感じた。



▲太鼓をたたくとやまとさん(右)朝也さん(左)

1号館では「奇席」が開かれ、柳家小団治師匠による落語太鼓の説明があり、桂やまとさんと春風亭朝也さん達が、太鼓の打ち方や落語などを披露した。

メイン会場では多くの支部員が集まりビールや酒を酌み交わし、福引抽選会などもあり、楽しい一日を過ごした。

（徳永勝彦）

■TOPICS

まだまだ長生きして 欲しかった



●昨年十月三日に亡くなった栗原泰房氏の葬儀は、秋風の吹き始めた十月八日に、狛江市の泉龍寺院で執り行われたが、前夜の通夜には当支部から池田支部長、大野幹事長等執行部の有志五名が出席した。母校・中大の附属高校に長年勤務され、平成三年三月に中央大学高等学校長（10代）を経て定年退職した。

●教職一筋に三十有余年を送られただけに教え子は多く、当日は最寄り駅から通夜会場まで長蛇の列が続いた。

通夜の追善供養の後、教え子等の卒年別の「清め」の輪ができ、恩師を偲ぶ献杯が繰り広げられたが、各グループに共通する会話は「泰房先生には世話になった・・・」で、面倒見のよかった栗原先輩の人柄が偲ばれた。

卒寿を目前に、まだまだ長生きしていただきたい先輩だ。

（平山惟美）

白門スポーツ

●東都大学野球秋季リーグ戦●

本命なき戦国時代続く

平成27年秋季リーグ戦は、雨で中止になった第4週に亜大と国学院大の3回戦が行われて、勝利した方が勝率で優勝の榮譽に輝くという大一番となり、6回に逆転した亜大が3季ぶり24度目の優勝をした。



▲逆転優勝にわいた亜大キャンパス (写真 平山惟美)

敗れた国学院大は、一挙に5位に転落して夢ははかなく消えた。二部から昇格した日大の健闘もあったが、亜大・中大・専大を含めて勝点3が4校並んで、国学院大が勝った場合は、最下位校を除いて5校がそろって勝点3となり、まさに戦国東都の大混戦で終幕した。

中大にも優勝のチャンスがあったが、亜大にストレートで連敗し

たのが祟り、専大と同率3位に終わった。

▽3回戦 (亜大2勝1敗)

国学院大	0	0	1	1	0	0	0	0	0
亜大	0	0	0	0	0	4	0	1	x
	5	2							

< 秋季リーグ戦成績 >

(学校)	(勝敗)	(勝率)	(勝点)
①亜大	9勝5敗	(0.643)	勝点4
②日大	8勝6敗	(0.571)	勝点3
③中大	7勝6敗	(0.538)	勝点3
③専大	7勝6敗	(0.538)	勝点3
⑤国学院大	6勝6敗	(0.50)	勝点2
⑥駒大	2勝10敗	(0.167)	勝点0

●バレーボール●

全日本インカレに

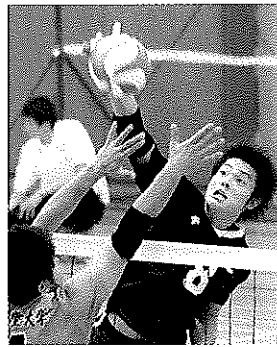
連覇の偉業達成

中大の運動部で、箱根駅伝の陸上競技部と野球部の活躍には注目度が高く、OBを含めた多くの関係者が常に声援を送っている。

野球人口の裾野が広いことと駅伝ランナーが走る沿道住民の応援

は、学校の区別なく熱いものになり、正月の風物詩にもなっている。そんな環境とは異なる中で、中大バレーボール部がいぶし銀の活躍で注目を集めた。関東大学春季リーグと同秋季リーグ戦を制し、全日本インカレにも勝利して3冠を達成した。

東日本インカレには敗れたが、全日本インカレは連覇の偉業を成し遂げ、大学バレーボール界に中大ありと強く印象づけた活躍で母校の名声を大いに高めた。



▲中大バレー部の対校試合 (写真 中央大学)

そして、勢いを得て12月には、天皇杯・全日本バレーボール選手権大会に出場し、企業チームの強豪・サントリーを撃破する殊勲の金星をあげ、ベスト8のすばらしい成績を残した。

今年の新チームも基礎をしっかりと鍛えられていると聞いているので、期待は大きい。

(平山惟美)

●白門レガッタ戦記●

平成27年11月14日、この日は白門レガッタの大会の日である。

我々、板橋白門会は二艇の出艇である。一艇は成人の部、もう一艇は成人男女混成の部に出艇する。後者の混成の部で漕手を担当。

11月も中旬になると肌寒く、小雨もパラ付いていてとても寒い。9時に集合したが、体感温度は10度を切っているように感じた。

白門レガッタの競技方法は、午前に1本、午後1本、計2本漕ぎ、合計タイムで争う。



▲優勝チーム 右から二人目及川選手 (写真 佐藤道則)

我々は1本目で男女混成の部のトップに立ったが、2本目も揃えないと勝つことはできない。

2本目の前、皆で夏場の練習の成果を確認し、平常心で臨んだ結果、他の艇の追撃を振り切り優勝。

その後の懇親会で飲んだビールは格別においしかった。(及川智久)

告知板

●観桜会

開催日 3月27日(日)
場所 よし邑

(板橋区蓮根2-19-12)
時間 午前11時30分～
午後1時30分

方式 今回は散策を行わず

「よし邑」の庭園に咲く桜を觀賞しながら、食事会です。

(観桜会の案内状は、すでに別便で発送いたしました)



●定時総会日程

日時 6月11日(土)
会場 区立文化会館
開始 午後6時より

(総会の案内状は、後日別途ご案内いたします)

●秋の旅行について

平成27年度秋の旅行は、日帰り旅行で東京湾クルーズと東京スカイツリーの予定でしたが、旅行幹事長急病で中止になりました。

平成28年度につきましては、6月実施の定時総会において、新役員のもとで検討いたします。

★新入会員

▽今村哲也(いまむらてつや)

卒業 平成11年・文卒
住所 板橋区板橋
趣味 音楽

▽後藤英二(ごとうえいじ)

卒業 昭和55年・商卒
住所 さいたま市北区宮原
趣味 ゴルフ

▽柳原末緒(さかさばらみお)

卒業 平成16年・経卒
住所 板橋区加賀
趣味 料理・散歩

▽高月利昌(たかつきとしまさ)

卒業 昭和59年・法卒
住所 板橋区常盤台
趣味 山歩き

(常盤台ブロック)

▽吉田規子(よしだのりこ)

卒業 平成9年・法卒
住所 板橋区成増
趣味 日本舞踊

▽吉田豊明(よしだとよあき)

卒業 昭和58年・商卒
住所 板橋区赤塚
趣味 野球

(赤塚ブロック)
(敬称略)

当支部へようこそ!!

昨年10月より本年2月までの間に、会員の紹介・区民まつり・ホームカミングデーなどイベント会場での募集活動により6名という大勢の仲間が入会されました。本当にうれしい限りです。ご入会心より歓迎いたします。

☆ ☆ ☆

訃報

▼栗原泰房氏

卒業 昭和25年・法卒
平成27年10月3日逝去

▼平田 豊氏

卒業 昭和53年・商卒
平成27年10月逝去

謹んでお悔やみ申し上げます。
(事務局 徳永勝彦)

「惜別の歌」作曲者のこと

「惜別の歌」は、鳥崎藤村の詩に、予科生だった母校の学生が曲を付けた歌であることは、中大で学んだ者なら皆知っている。

藤村は1943年(昭和18年)に71歳で亡くなった。新制大学を卒業した人達の多くは、予科の経験がなかったから、予科生に関する認識が薄い。

作曲者の藤江英輔氏が、10月14日に90歳で死去との新聞の訃報記事を見て、目を見張った。現代を生きた先輩だった。



▲「惜別の歌」斉唱 (1月23日)
支部新年会

日本人の多くは、中大の校歌や応援歌は知らなくても「惜別の歌」なら知っている。

最初、歌声喫茶で歌われ、小林旭さんのレコードが出てヒットし、別の歌手も歌って全国に広まった抒情歌なのです。
(大野正浩)

会員エッセイ(第一回)

この度、編集部では、会員の方々に自由なテーマでエッセイを書いていただくという企画をスタートさせました。今回は第1回ですので、深山 宏さんと菅 東一さんに執筆をお願いしました。

私の事業継承

深山 宏

最近、東京商工会議所、銀行等で事業継承やM&A(Ⓜⓐ)企業の合併や買収のこと。編集部)のセミナーが行われています。私自身二代目として事業継承を受け、三代目に譲渡する時期を迎え、何時行動すべきかを日々考慮しております。

私が引き継いだ時は、周囲の人から「地盤があつて楽でしょう」と言われました。私から見れば、先代はゼロからの出発で、最悪の場合には振り出しに戻ればよいのですが、こちらは衰退すれば無能力者呼ばわりされるのです。

子供の頃から親の苦労を見てきましたので、親の会社を引継ぐことは絶対やるべきではないとの気持ちでした。

いわゆる戦後の日本の経済発展

は、大企業の成長によるところですが、その礎としての中小企業の活動があつたればこそと考えます。その中で企業の栄枯盛衰は計り知れず、わが業界では1社が潰れば、3〜4社が設立されるといわれました。

現在、公共事業の増加等で活況のように思われますが、今後の会社継承の難しさは、私の時よりも困難を迎えると考えられます。

今日、杭工事の偽装問題が取り上げられています。職種が多く、下請け協力企業との連携をしなければなりません。また、協力企業においても同じ状況で、2次・3次下請等複雑な構造になります。

これは私の業界の経験ですが、おそらくどの業界においても同じような構造の中で、大・中小企業が活動していると考えます。その中で、我々の今後を占う方法を検討しなければなりません。

当業界は以前、公共工事の減少の中、共同企業体方式が採用されました。現在もこの方式が採用されています。

しかし、現実には本来の趣旨といささかかけ離れたものとなっております。また、中小企業の組合の設立が一時はやりましたが、これも現在は下火になりました。

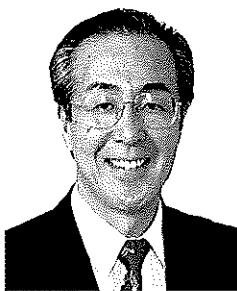
また一時、大手企業のなかでも合併の話が多数進行しましたが、ごく一部を除き現実には至らなかつたようです。それは1+1が2にならない構造的な業界だからです。

その点、公共工事の減少等環境の変化を見据え、将来も自社が残つたままで、仲間が資本を共同責任化することにより、事業継承してゆくことが出来ればと考えています。

(昭41年・商卒。副支部長)

「人との巡り合い」についての一考察

菅 東一



にありがとうございました。平成四年から二十余年、区議会議員、都議会議員として活躍してこられたのも、支部員の皆様に支えていただいたお蔭と、今しみじみと感じております。

今は亡き秋元先生、千葉さん、竹田さん、浜元支部長、金子さん、そして三宅さん等々鬼籍に入られた方々について、特に印象に残っております。

小生も既に古稀を過ぎ、今人生を振り返ってみますと、何よりも「人との巡り合い」が極めて大切なのではないかと考えております。

そもそも小生が議員生活に入ったのも、郷里の先輩の後継者として選挙に出るように田中晃三先生に説得された結果であり、また都議会議員として活躍出来たのも、現板橋区長の坂本氏との関係であり、「人との巡り合い」の結果であるような気がしてなりません。言葉を換えれば、運ということではないかと思えます。

編集部の伊藤氏より、会報に掲載する随筆を寄稿して欲しいとのご依頼があり、取り立てて書くべきこととてないものの、折角の申し出であり筆を取った次第です。

顧みますと、小生、支部の皆様方に二方ならぬお世話になり、本当

小生の後援会長をしていただいた方は、高校一年で中退し、就職し、二十五歳で独立し、現在、東証一部上場の会長として活躍しておりますが、何でそんなに伸びたんだと伺いますと「やっぱり良

い人と巡り合ったんだよ、運も良かった」とよく話しておられたのを覚えております。

もちろん能力、勤勉、正直、手腕等の要素も必要とは思われますが、「一義的には「人との巡り合い」が人生にとって極めて大きな要素ではないかと思えます。

小生、昨年春に叙勲の榮に浴しました。これは小生だけのものではなく、多くの方々に支えていただいた結果であり心から感謝を申し上げます。支部の皆様方にもお礼申し上げます。また祝賀会に多くの支部員の皆様にもご出席いただきました。ありがとうございます。これも「人との巡り合い」の結果だと思っておりますし、巡り合った二人一人の方々に感謝の念で一杯であります。

小生まだまだ老ける年ではありませんが、脊中管狭窄症の症状のため、腰が痛い状態であり、いずれ手術をしようかと考えております。いずれ回復したならば、いくらかでも世の中に恩返しが出来よう頑張りたいと考えております。

とりとめもない文章になりましたが、支部員の皆様と「巡り合い」が出来ましたことに感謝を申し上げて筆を置かせていただきます。

(昭42年・法卒。副支部長)

白門スポーツ2

★箱根駅伝★

■予選会(平成27年10月)

10月17日、朝から雨まじりの曇り空、立川の昭和記念公園に出かけた。駅前の通過地点で待機してカメラを構える。徳永、照選手と相馬一生、新垣魁都選手は写すことができたが、町澤大雅選手は、その手前を他校の選手が走っていたため、うまく写せなかった。



▲相馬選手(ゼッケン120)
新垣選手(ゼッケン118)

◀徳永選手(ゼッケン114)

公園内の各校の集合地点に移動し、大勢の応援者や競技を終えた選手達と発表を待つ。1位から出場権を得た大学の歓声が、風に乘って流れてくる。なかなか中大の名前が発表されない。やっと8番目に中大と出て歓声が上がった。号外には走る選手たちの真ん中に、竹内大地選手が写っていた。

■本戦(平成28年1月)

本戦は、テレビでの観戦である。とても現地には行けないし、テレビが一番状況を把握できる。

1月2日、いよいよ開始である。朝早くから落ち着かない。皆一斉にスタートした。1区の町澤大雅選手が順調に飛ばしている。テレビにもゼッケンのCマークが写る。2区の徳永、照選手がかなり遅れた。予選会では、日本人選手の中でトップだったのに・・・。

テレビでは、上位のチームばかりが画像に写る。中大が全盛の頃は、Cマークが常に写っていた。それが当然のことのように思っていた。しかし今は違う。往路は16位という結果だった。

1月3日、初日と違って、前日の8位までが1位から順に走り、9位以下が10分遅れでの一斉スタートである。

それでも6区の谷本拓巳選手と7区の藤井寛之選手は頑張ったが、後が続かず、結果は、往復15位でシード権を再び取れなかった。

予選会1位の日大は11位、シード権で出場した明大が14位という番狂わせがあった。今年も秋には予選会に応援に行こう。

(文・写真とも 伊藤 潤)

■ホームページの閲覧方法

当支部では、インターネット上でも広報活動を行っています。現在、ウェブ上での編集は、パソコン同好会会長の佐藤道則相談役が中心となり、提供されています。

ウェブページで当支部のサイトを見るには、インターネットに接続し、WebページのアドレスバーにURLを入力し、エンターキーを押せば、左の画面が表示されます。



URL (アドレス)

<http://www.gakuinkai.com/itabashi/>

又は、検索ボックスに板橋白門会と入力し、エンターキーを押すと板橋白門会のホームページが文字で表示されますから、そこをクリックしても、右の画面が現れます。

インターネットに接続していない場合には表示されませんが、メーカーあるいは販売店にお聞きになってください。

(編集部)

■向原

向原の「向こう」とは、相対し向き合った状態をいうもので、何かに向き合った所とか原つばという意味と思われます。

伝説によりまますといろいろな説がありますが、隣の長崎(今の豊島区)から見てとか、大谷口から谷を越えてとか、小茂根に館跡があり、この館跡から見て向かいの原と名付けられたとかいわれまます。

地名の由来…③⑥

「向原」の巻

資料の中に向原が出てくるのは「風土記稿」に、上板橋村の小名向原とあるのが、地名としての最初ということになります。江戸時代中期以降です。

向原は現在、一丁目、二丁目、三丁目に分かれており、一丁目には、児童館、遊園、保育所があり、向原遺跡もあります。二丁目には、向原小学校や向原地域の産

土神(うぶすながみ)で須佐之男命を祀る八雲神社があります。三丁目には、向原中学校と向原団地が並んで建っています。

■八雲神社

八雲神社の境内には、文政二(一八一九)年に奉納された不動尊石像に「不動講中十七人」とあります。(編集部⑨講中コウジュウとは、神仏などにおまいりする仲間をいう)住民はほとんど三原氏と大野氏です。

私達板橋区支部の会員でもありました故清水治男先輩は、板橋の史談会に入っておられて、私もいろいろ教えていただきました。その清水先輩が八雲神社について書かれておられますので、少し紹介いたします。

「八雲神社 向原地域の人々の産土神であり、毎年九月十五日に本祭が行われている。現在は東新町の氷川神社の末社だが、江戸時代ここに古くから住んでいた三原・大野氏の先祖が愛知県津島市にある津島神社(天王様)を勧請したものである。祭神は須佐之男命で昔から疫病の守護神として祭られていた。八雲とは須佐之男命が和歌の初めとして詠んだ「八雲たつ出雲八重垣妻籠に八重垣つく

るその八重垣を」からきている。八雲社の神紋は農産物のキウリであり、キウリを神前に供して厄払いをしていた。(以下略)

〔出典「いたばし郷土史事典」74ページ 板橋史談会編集 平成元年四月三十日 発行〕



▲八雲神社

昭和二十年頃まで向原団地付近は、向原田んぼといわれていました。その田頭付近に雨乞地蔵があります。お地蔵様で雨乞いに信仰されているのは珍しいことです。また上板橋村では、石神井川に架かる道として車の通れる道は、川越街道の下頭橋と白橋道の二つだけであったので、これらは重要な道でした。

(文・写真とも 中三川孝幸)

編集後記



★桜の季節になった。平安時代末期、西行法師は花を求めて漂泊し、歌を詠んだ。

★今年の観桜会の案内チラシに、桜雨々という言葉がある。確かに桜の咲く頃は、春の雨が降る。桜雨、ずいぶんおしゃれな言葉だと思つて調べてみたら「広辞苑」に載つていた。

誰が使い始めたのかわからないが、若い人の間で5年ほど前から使われていて、歌詞にも出てくるらしい。

★まだ若い頃、中大卒の先輩たちとバス旅行で「遠野の桜」を見に行つた。

桜の木の下で、円座を組み酒を飲んだ。ちよこの中に花びらがひとひら落ちてきて、それをぐつと飲みほした。

穏やかな暖かい太陽が、さんと降り注いでいた。遠い昔の想い出である。

(伊藤 潤)